

『マタイ福音書と  
ウルトラマン』

ヨゼフ 吉川 智彦

私の小さいころにウルトラマンというテレビシリーズが放送してありました。(あ、今でもやってるか。)その中に私が幼稚園のとき、ちょうど四旬節のころに大変衝撃を受けたお話がありました。が、どうも最近それがマタイ福音書のある有名な一節を意識したものではありませんか?といわれているのです。

そのときのウルトラマンはエースという名前で、普段は北斗星児という名前の青年として防衛隊で働いています。ある日子供たちがウルトラマンのお面をつけて、非力そうな宇宙人の子供を集団でいじめている光景に出会います。彼らは、宇宙人はみんな悪いやつだからウルトラマンになってやっつけてやるんだ、と意気込んでいます。自分が普段している「たたかいて」がこんなふう子供たちに受け取られていることにショックを受けた北斗は、子供たちをこう論

します。外からやってきた人たちがみんな悪いやつだと決めつけるのは間違っている。ウルトラマンはそんなことをしない。この子供はおそらく故郷を侵略者に奪われたサイモン星人という難民だから、みんなで守ってやるべきだ、と。

もとより悪い子供達ではないので彼らはみんな宇宙人の子供を自分たちの秘密基地にかくまわり、親切に世話をします。さて、彼を追ってきた侵略者はこう地球人に言います。今回は地球に危害を加えるつもりはない、その宇宙人の子供さえ引き渡せば、そのまま帰る。ただし、そうしなければ子供たちの住む町を完全に破壊してしまふ、と。むろん大人たちは面倒なことさと彼を引き渡さうとするのですが、北斗は反対します。「家や道はたとえ踏みにじられても、また立て直すことができます。でも、あの子供たちの気持ちは、人間の気持ちは、一度踏みにじったら二度ともとは戻りません。」

ところが、なんと姿を見せない侵略者の正体は弱く小さなサイモ

ン星人の子供そのものだったので。超能力を持ったウルトラマンにしか聞こえない声で悪魔は北斗にささやかけます。「私を撃てるか」と。子供たちの命を守るために彼は侵略者を撃ち殺します。でも周りにいた子供たちには、この子をなんとか守れと言った当の北斗青年が自分たちを裏切ったようにしか見えません。怒りに満ちた子供たちは「もう、お前の言うことなんか聞くもんか」「やさしさなんか信じないぞ」と彼に詰め寄ります。彼に残された道は自分の正体がウルトラマンであることを明かし、人間としての生活を捨てて(つまり人としては死んで)、星に帰るしかないのです。変身して宇宙人の残していった怪物を倒した彼はそれでも地球を去っていく前に、子どもたちに次のような言葉を言い残していくのです。

「優しさを失わないでくれ。互いに助け合い、弱いものをいたわり、世界のどの国の人々とも仲良くしようとする気持ちを失わないでくれ。たとえその気持ちが何百回裏切られようと・・・それが私の、最後の願いだ。」

子供たちの心はずたずたに傷つき、ウルトラマンは地球を追われ、そして町や道は戦いの中で破壊されたのだけれど、それでもウルトラマンは人を信じるしかない、と言いついていきます。なぜでしょう? 殺された侵略者は死ぬ前に「人間の子どもからやさしさを奪うことが目的だった」と語るのです。もし人が裏切られ傷ついて、もう他人の心を信じまいと思つたとしても、彼は果たして幸せに生きられるのでしょうか? 結局互いが互いを信じない世の中で人は人として大切なことを守っていくことはできない。ならば、信じるしかない、自分の信頼が必ず裏切られる悲しさを胸に秘めて。裏切られることを確信しながらも信じ続ける生活態度は決して卑屈でもお人よしでもない。それは私たちに悪意に満ちた世に対するただ一つの「たたかい」の方法ではないかと思うのです。

今、イスラエルで、イラクで世界の多くの地域で平和を求め動きは続いています。多くの人はどうせまた停戦合意なんて破られるんだから、どうせ戦争なんかなく